

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

日本人高齢者の国際退職移住とロングステイツーリズム

小野真由美 (ノートルダム清心女子大学文学部准教授)

「第二の人生を海外で」という憧れをもつ人々が、その場所としてマレーシアを選び、長期間暮らしている。『国際退職移住とロングステイツーリズム マレーシアで暮らす日本人高齢者の民族誌』は、老後に海外で暮らしたいと思う日本人高齢者のマレーシア移住と長期滞在(ロングステイ)に関する民族誌である。

高齢者および退職者の国際退職移住は、1960～70年代から先進事例のみられる欧米に比べ、アジアでは比較的新しい現象である。1990年代頃から日本人や欧米諸国出身の中高年退職者がマレーシア、フィリピン、タイ、インドネシアなど、物価や気候の面で生活しやすく、外国人退職者向けの受入制度を実施する東南アジアの国々へ移住・長期滞在する動きが顕著である。

マレーシアは、マレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラム(MM2H)を実施しており、観光・芸術・文化省による促進活動が活発である。資産など一定の条件を満たす外国人長期滞在者を選別的に受け入れる政策であるMM2Hにとって、日本は長年のあいだ主要対象国とされてきた。マレーシアはロングステイ人気滞在国として知られるようになり、2000年代から日本人高齢者の長期滞在や移住が盛んとなっている。



トレッキングで、オラン・アスリの村を訪問する日本人高齢者たち＝2008年2月7日(筆者撮影)

本書の元となる調査は、日本とマレーシアにおいて04年から12年まで断続的に行われた。日本国内の調査では、海外ロングステイが民間主導で新たなツーリズムのトレンドとして発展し、老後にマレーシアで過ごすことが日本人高齢者のライフスタイルとして普及する過程を把握した。また、06年から09年には、マレーシアにおいて長期フィールドワークを実施し、移住者159名に対する聞き取り調査を行い、移住の経緯やマレーシアでの日常生活の実態を把握した。本書は特に、「定住」志向の長期居住者が集まる首都クアラル

ンプールと、数日間から3カ月程度の滞在を繰り返す「渡り鳥」型の長期滞在者の集まる高原リゾートのクアラルンプールに焦点を当てた。

クアラルンプールとクアラルンプールとクアラルンプールの事例からは、国際退職移住の互助組織の形成とネットワーク化が共通点として挙げられる。クアラルンプールでは、MM2Hビザを取得して定住する「セカンドホーム」の互助組織による相互支援が活発化し、日本人高齢者が定住して暮らしていくための環境や必要なサービスを自らの力で主体的に整備していく活動が続けられた。なかでも、日本人高齢者専用の介護施設の開設に伴い生じた「介護移住」型の事例を取り上げ、国際退職移住に伴うケアの越境化を指摘した。

セカンドホームのコミュニティは、マレーシアで暮らすための知識や情報を共有する相互学習の場として機能するだけでなく、移住者同士が交流することによってライフスタイルや生き方を創造する主体となる。家事労働や介護の担い手となる近隣諸国から流入する安価な労働力をはじめ、マレーシアの環境や資源を巧みに利用し、高齢者自身が新たな生き方を創造していく力は、閉塞感のある日本を離れ「ここで生きてみよう」と思わせる説得力をもつのだ。

国際退職移住者たちは、現地で暮らすセカンドホームの日常生活のなかに、自己の新しい生き方の可能性を見いだすのである。日本人高齢者のマレーシアへの国際退職移住の民族誌的研究から明らかになったのは、日本人高齢者にとって老後の海外移住とは、自らが追求する生き方を支えるサービスを創り出し、ライフスタイルを創造していく運動であるということであった。

< 筆者紹介 >

2013年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。専門は文化人類学。マレーシア、タイをフィールドに、国際退職移住、ライフスタイル移住、MM2H、ロングステイ、医療ツーリズム、介護リゾートについて調査研究を行っている。著書に『国際退職移住とロングステイツーリズム マレーシアで暮らす日本人高齢者の民族誌』(明石書店、19年)、共著書に『Escaping Japan: Reflections on Estrangement and Exile in the Twenty-First Century』(Berghahn Books、18年)がある。